

覚一本における河原兄弟の死について

——『平家物語』巻九「二度之懸」——

野見山 亜沙美

はじめに

覚一本『平家物語』巻九には、頼朝に従い戦に赴いた坂東武者が多く登場する。その中でも、一ノ谷の合戦に臨む武士たちが決死の覚悟で先駆けを行う「二度之懸」「二度之懸」は、当時の武士の姿を生き生きと描いている章段である。本稿では、「二度之懸」の前半部分に登場する河原兄弟の先駆けやその死が持つている意味を、覚一本以外の諸本と比較しながら考察し、そうしたうえで見えてくる覚一本の中での彼らの存在意義を論じていきたい。

また、覚一本と呼ぶ本文はすべて『新編古典文学全集46 平家物語（下）』を用いている。他の諸本については、注や表を参考にされたい。

一

「三章勢揃」から「小宰相身投」までの章段を一ノ谷の合戦と定義付けるならば、この「二度之懸」の章段はちょうど中間部分、合戦が始まった辺りの状況を描いたものである。前章段「一二之懸」で熊谷親子と平山が先陣を争ったことをきっかけに、物語の視点は徐々に戦場へと向かっていく。そして、大手にあたる生田森でも、今まさに戦いが始まろうとしていた。

河原太郎弟の次郎をようでいひけるは、「大名は我と手をおろさねども、家人

の高名をもつて名譽す。われらはみづから手をおろさずはかなひがたし。かたきをまへにおきながら、矢一つだにも射ずしてまちゐたるが、あまりに心もとなう覚ゆるに、高直はまづ城の内へまぎれ入って、一矢射んと思ふなり。されば千万が一つもいきてかへらん事ありがたし。わ殿はのこりとどまって、後の証人にたて」といひければ、河原次郎涙をはら／＼とながいて、「口惜しい事をも宣ふ物かな。ただ兄弟二人ある者が、あにをうたせておととが一人のこりとどまったらば、幾程の栄花をかたもつべき。所々でうたれんよりも、一所でこそいかにもならぬ」とて、下人どもよび寄せ、最後の有様妻子のもとへいひつかはし、馬にも乗らずげをはき、弓杖をついて、生田森の逆茂木をのほりこえ、城のうちへぞ入つたりける。

搦め手で熊谷と平山が先陣を争つたように、大手でも先駆けを狙う武者がいた。武蔵国住人である河原太郎高直、次郎盛直という兄弟である。熊谷や平山とは違い、このあと河原兄弟は二人揃って、平家方の真名辺五郎に討たれ、その場で死んでしまふのだが、この話は当時の武士の考えや現状を理解するにあたり、重要な場面として今までも研究が為されてきた。兄である河原太郎が、合戦前に弟の次郎盛直を呼び寄せて告げた言葉に関して、石母田正氏は、以下のように述べている。⁽¹⁾

ここで大名というのは、この時代のいわゆる大名・小名の大名で、東国でいえば、三浦・千葉などのような大土地所有者たる豪族であり、合戦にさいしては数百騎あるいは数千騎を指揮する一方の部将たる地位にあるものである。平家物語では東国の大名は、少いものでも五百騎はもっているとされる（富士川）。

右の武蔵国の住人の言葉によると、このような大名は、合戦にさいして、自分で手をおろさなくても、現実に戦闘などをしなくても、その家来たちの高名を自分の武勲とすることが普通だが、自分たち小侍は、自分で手をおろさなければ武勲を立てるわけに行かないというのである。(中略)この兄弟が、二、三人の下人・所従をつれ、日頃は耕作に使っている馬に乗って合戦に参加した典型的な名主級の下層武士であることは、「げ」という身分の卑しいもののはく藁草履をはいていったことから察せられる。かかる下層武士は、みづから手をおろして働かねば功名をたてられないが、大名たちはそのような下層武士の功名を自分の武勲として賞にあずかるのが普通だといっているのである。

石母田氏は「大名は我と手をおろさねども、家人の高名をもつて名誉す。われらはみづから手をおろさずはかなひがたし。」という冒頭の河原太郎の言葉に注目し、「大土地所有者たる豪族」たちは、自分自身が戦場に赴くことなく、家臣の手柄によつて名を立てられることを明らかにし、「典型的な名主級の下層武士」であった河原兄弟の姿を対比した。河原太郎の言葉は、当時の「大名」と「小名」の間にあつた大きな格差をありありと表現しているのである。

また、その「小名」である河原兄弟の姿を、鈴木則郎氏は「一所懸命」という生き方にあてて、

河原太郎の言葉で第一に注目されるのは、「大名はわれと手をおろさね共、家人の高名をも(ツ)て名誉す。われらはみづから手をおろさずはかなひがたし。」と述べている点である。ここでは、「大名」と「小名」との身の処し方の相違がはっきりと区別して認識されているからである。「われらはみづから手をおろさずはかなひがたし」は、小名、すなわち、小領主階級の者が戦場で顕著な軍功をあげるためには、身命を賭けて自ら戦う以外に方法はありえないという自覚の明らかな表明にはかならない。したがって、「高直(河原太郎)は、まづ城のうちへまぎれ入て、ひと矢あんとする也。されば千万が一もいきてかへらん事ありがたし。」という決死の覚悟の表明も、小名の「一所懸命」の生き方からすれば、当然の意志の姿勢を示すといわなければならない。

と述べている。身分の違いによって生じた格差が、「小名」である彼らの生き方に

も影響を与え、結果、自らの命を賭してでも勲功を得ることが何よりの目的であり、名誉であるという考えが「当たり前」となったのである。

そのような考えを裏付ける資料が、鎌倉幕府の正史として書かれた『吾妻鏡』にも存在している。文治五年七月二十五日の記事である。⁽³⁾

廿五日 癸未 二品、下野國古多橋驛に著御。まづ宇津宮に御奉幣、御立願あり。今度無為に征伐せしめば、生虜一人神職に奉るべしと云々。すなはち御上箭を奉らしめたまふ。その後御宿に入御。時に小山下野大掾政光入道駄餉を獻ず。この間、紺の直垂上下を著する者御前に候ず。しかうして政光、何者ぞやの由これを探ね申す。仰せて曰はく、彼は本朝無雙の勇士熊谷小次郎直家なりと云々。政光申して云はく、何事に無雙の號候ふやと云々。仰せて云はく、平氏追討の間、一谷已下の戦場において、父子相並び命を棄てんと欲すること度々に及ぶが故なりと云々。政光すこぶる笑ひて、君のために命を棄つるの條、勇士の志すところなり。いかでか直家に限らんや。ただしかくのごときの輩は、顧眄の郎従なきによつて、直に勲功を勵まし、その號を揚げんか。政光がごときは、ただ郎従を遣はして忠を抽んづるばかりなり。所詮今度においては、みづから合戦を遂げ無雙の御旨を蒙るべきの旨、子息朝政・宗政・朝光ならびに猶子頼綱等に下知す。二品興に入りたまふと云々。

頼朝が下野国に赴いたとき、小山下野大掾政光が食事を献上した。その間ずつと頼朝の傍に伺候している者がいた。政光が「何者ですか」と尋ねると、頼朝は「彼は本朝無雙の勇士である熊谷小次郎直家だ」と答えた。政光がさらに「どうして無雙というのですか」と尋ねると、頼朝は「一ノ谷の合戦のときに父と並んで命を捨てる覚悟で戦った」と返す。それを聞いた政光は笑い出し、「主君のための命をかけるのは勇士が志すものです。どうして直家に限るでしょうか。このようなもの(直家)は郎従がないから、自分で勲功を勵まして名をあげたのでしょうか。自分ごときであると、ただ郎従を遣わして、その忠を尽くすだけです」と言ったのである。小山政光は下野国の大領主であり、紛れもない「大名」だと言える。⁽⁴⁾やはり当時の考え方として、大名は家臣の手柄で名をあげ、小名は自らの命をかけて勲功を得る以外はないことは周知だったのである。

【表 2】

読み本系				語り本系				三草勢揃	二度之懸	坂落し	越中前司最期
源平闘諍録	源平盛衰記	南都本	長門本	両足院本	中院本	百二十句本	城方本				
○(高重)	○	○	×	○	○	○	×	○(行泰)	×	×	×
×	○(行安)	○(小三郎)	×	×	×	×	×	○(行泰)	×	×	×
×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×
×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×

・流布本：梶原正昭『平家物語』桜楓社 一九七七年三月
 ・城方本：『平家物語 附承久記』国民文庫 一九一一年五月
 ・百二十句本：水原一校注『新潮日本古典集成 平家物語(下)』新潮社 一九八一年十二月
 ・中院本：今井正之助・櫻井陽子・鈴木孝庸・千明守・原田敦史・松尾葦江・村上學・山本岳史『校訂 中院本平家物語(下)』三弥井書店 二〇一一年三月
 ・両足院本：伊藤東愼・大塚光信・安田章 編『両足院本 平家物語』臨川書店 一九八五年四月
 ・長門本：麻原美子・佐藤智広・小川栄一・小井土守敏・大倉浩 編『平家物語 長門本 延慶本 対照本文 下』勉誠社 二〇一一年二月
 ・四部合戦状本：高山利広 編『訓読 四部合戦状本平家物語』有精堂 一九九五年三月

が、侍大将である梶原景時の名前さえも記されていないことなどから信憑性にかけての部分があると判断できるため、今回は例外として扱うこととする。一方、読み本系の諸本の多くも「三草勢揃」に藤田の名を載せているが、さらに「二度之懸」と「越中前司最期」のどちらかで藤田の最期を描いている。読み本系の『平家物語』の中の藤田は、「三草勢揃」の章段で範頼に続く勢の一人として名を挙げられ、「二度之懸」もしくは「越中前司最期」の章段にて命を落とすのである。

「越中前司最期」にて藤田の最期を描いている諸本は、延慶本、長門本、四部合戦状本である。例として、延慶本の本文を引用しよう。⁹⁾

又、猪俣党ニ藤田小(三)郎大夫、深入シテ戦ケルガ、姉ガ子ニテ、武蔵国住人江戸四郎ト云、十七ニナル若君、藤田ヲ敵ト思テ、ヨク引テ遠矢ニ射タリケレバ、母方ノ伯父ガ、振仰ゲテ物見ムトスル、頸ノ骨ヲゾ射タリケル。射ラレテ、馬ヨリ傾キケル所ヲ、阿波民部大夫成良ガ甥ニ、桜葉外記大夫良遠ガ郎等、落合テ打テケリ。

長門本、四部合戦状本とも内容に大異はなく、姉の子である武蔵国住人江戸四郎(つまり藤田行康の甥)が敵だと見紛えて放った遠矢に内兜を射られ、阿波民部の甥である桜葉外記大夫の郎等たちに討たれるという、実にあつけない最期が描かれている。この話の前に、越中前司盛俊が猪俣小平六則綱に討たれているのだが、則綱と同じ猪俣党であった藤田の最期は、まるで則綱と盛俊の話に付け加えられたかのようなのだ。さらに延慶本と長門本ではその後、「カヤウニ思々ニ戦ヒケルホドニ」と続け、平家が船で逃げていく場面へと続いていくのであり、藤田のエピソードは、猪俣党である則綱の話から繋がりが、さらに様々な戦いがあつたのだという「思々ニ戦ヒケル」との言葉を強調させるがために描かれているとも言えるだろう。それに対して、南都本と源平盛衰記は、前述通り「二度之懸」の章段によって藤田の最期を描いている。どちらも河原兄弟と同じ時に、同じ場所で先駆けをし、同じく討死するという流れはほぼ一致しているが、源平盛衰記には、藤田に関する記述が南都本以上に詳しく書かれている。その場面を抜粋して見ていきたい。卷第三十七、「景高・景時城に入る並景時秀句の事」の章段、河原兄弟が討たれてすぐの場面である。¹⁰⁾

同国猪俣党に、藤田三郎大夫行安続きて、逆茂木を登り越えんとしけるを、真鍋、引き固めて放つ矢に、同じくここにて討たれにけり。藤田が妹の子に江戸四郎といふ者あり。今年十七になりけるが、続いて駆け入り散々に戦ふ程に、鎧の胸板を射られて弱る処を、阿波民部大輔成良が甥に、桜間外記大夫良連が手に討たれぬ人見四郎もここにて討たれにけり。勲功の時、河原太郎と、藤田行安が子共に、生田庄を給ふ。その墓所の為なり。今の世までもかの社の

鳥居の前に、堂塔を造立して菩提を弔ふとかや。

ここに出てくる桜間外記大夫良連とは、延慶本等にも登場した桜葉外記大夫と同一人物であると見て良いだろう。つまり源平盛衰記は、藤田は真鍋の矢によって討たれて、その妹の子である江戸四郎は桜間外記大夫良連に討たれるという、南都本の内容と延慶本、長門本、四部合戦状本の人物を織り交ぜたような作りとなつていゝ。しかしそこから後、源平盛衰記は独特の内容を記す。傍線を引いた部分であるが、平家討伐が終わって鎌倉の頼朝が勲功を与えるというとき、河原太郎と藤田の子供に、生田庄が渡されたというのである。しかもその理由は、死者を弔うためであるという¹¹⁾。これが本当であれば、河原太郎と藤田の死は決して無駄なものではなく、当時の武士が戦いに赴く大半の理由であつただろう。「一所懸命」の意義にも即しており、十分な恩賞を得られた意味のある死であつたのだと考えることが出来る。しかしこの事柄についての詳細が述べられているのは、今まで見てきた『平家物語』諸本では源平盛衰記だけである。やはり源平盛衰記の独自の挿話であるのかとも思えるのだが、鎌倉時代に書かれた歴史書『吾妻鏡』にも、この源平盛衰記とよく似た内容の記述を発見することができた¹²⁾。

五日 甲午 去月、攝津國一谷において、平家を征伐せらるるの日、武藏國の住人藤田三郎行康、先登して討死せしめをはんぬ。よつてその勲功の賞に募り、かの遺跡においては、子息能國傳領すべきの旨、今日仰せ下さる。御下文に云はく、

件の行康は、平家合戦の時、最前に進み出で、その身を討ち取られをはんぬ。よつてかの跡の所知所領等は、相違なく男小三郎能國相傳して知行せしむべきの由と云々。

元暦元年三月五日の記事である¹³⁾。この記事によると、一ノ谷での平家征伐のときに先駆けをした藤田三郎行康への勲功として、息子の能國に所領を相伝したと書かれている。つまり、一ノ谷での藤田の先陣はしっかりと認められ、それによって藤田の息子は相応の恩賞を受けることができたのだと『吾妻鏡』は記しているのである。『平家物語』とりわけ源平盛衰記と『吾妻鏡』の成立年代や内容の関係性については諸説あるが、藤田の最期は、延慶本等に見られた「越中前司最期」によるあ

つけないものではなく、南都本と源平盛衰記の「二度之懸」に書かれていたように先陣を司つた可能性が高いと言えるだろう。

では、語り本系統の『平家物語』には、藤田行康はどのように描かれているのか。先ほどの【表2】を見ても分かる通り、語り本系の大半は「三草勢揃」で名寄せの一人として名を載せた後、どの章段にも藤田を登場させていない。もちろん名寄せの場面に載せられた人物すべての行く末を『平家物語』が描いているわけではないが、それでも読み本系ではほとんどの諸本が描いていた藤田の最期を描かず、同じ一ノ谷で討死を果たした河原兄弟のエピソードを詳しく描いているという点には、違和感を覚えずにはいられない。さらに『吾妻鏡』には藤田の名はあれど、河原兄弟の名は元暦元年二月五日の記事、合戦初めの名寄せにあたる部分にしか書かれていない。鎌倉幕府の正史として編纂された『吾妻鏡』から見ると、一ノ谷で先陣を切つたのは藤田であり、河原兄弟が実際どうであつたのか、藤田と共に先駆けをしたのかは分からない。だが、源平盛衰記と、そこに書かれていた堂塔が「河原靈社」として現在も残っている以上、河原兄弟も同じく先を駆けて討死をした可能性は十二分に考えられる。だとすれば、語り本系の『平家物語』諸本は、意図的に藤田のエピソードを省略したのだと考えるのが順当であろう。河原兄弟の先陣の話をこれだけ詳しく載せている語り本系が、同じく先陣を果たした藤田の存在を知らなかつたとは考えづらい。つまり同じような最期を遂げた河原兄弟と藤田のうち、河原兄弟のみをピックアップしたのが語り本系「二度之懸」の前半部分なのである。そうすると、ここでまた大きな疑問が出てくる。なぜ、語り本系の諸本は藤田のエピソードをなくし、河原兄弟だけを取り上げたのか。両者とも同じ東国武士であり、武蔵七党の一である。「大名」ではない「小名」である彼らの悲劇を描きたかつたのであれば、河原兄弟ではなく藤田を登場させても問題はなかつたはずである。ではなぜ、語り本系の諸本は、藤田ではなく河原兄弟をとりたてて描いたのか。その理由こそが、語り本系に描かれた河原兄弟という存在の真意ではないかと思ふのである。

三

河原兄弟と藤田行康との決定的な違い。それは、河原が「兄弟」であったということである。前に挙げたように、延慶本や源平盛衰記には、藤田の甥である江戸四郎が登場する。しかし、源平盛衰記では藤田と江戸四郎がともに戦うような描写はせず、藤田が討たれたのちに江戸四郎の名を出し、そして延慶本に至っては、間違えとはいえず、甥っ子であるはずの江戸四郎によって藤田は射られている。どちらも血のつながりは描いていても、共同で戦ったという記述はされていない。しかし河原太郎・次郎の兄弟は、どの諸本を見ても兄弟ともに先陣を果たし、兄弟ともに討死をするという内容はほぼ一致している。河原は兄と弟、二人で一つとして描かれているのである。ここが藤田と河原の明らかな違いであると言えよう。『平家物語』のなかには、このような「兄弟」や「親子」を取り上げた話が多く載せられている。『平家物語』自体が平家一族の話であるのだから当たり前なのだが、それは平家のみに限られたものではない。第一章でも少し触れたが、覚一本「二度之懸」の前の章段にあたる「一二之懸」で平山季重と熊谷直実が先陣争いをする場面でも、熊谷は自らの先陣の意志を、息子である直家に話す。そして平山も同じく先陣を狙っているという情報を手に入れた熊谷は、息子と二人で夜明け前に持ち場を離れて一ノ谷の西の木戸口へと向かう。遅れてきた平山とともに先陣を争って戦う最中も、熊谷は手負いした息子直家に対して心配するような素振りを見せ、どのように戦うべきかを教授する。「一二之懸」という章段名からも、熊谷と平山の先陣争いが主な内容であるのだが、それにしては平山よりも熊谷親子に関する記述が多く見られることは明らかである。結果、西の木戸口の一陣は平山、二陣は熊谷と定められたのだが、聞き手や読者の多くは、平山よりも熊谷に感情が向いてしまうだろう。

そして次の章段、つまり河原太郎の語りから始まる「二度之懸」の章段の後半部分にも「親子」が登場している。河原兄弟が討たれたと聞き、五百騎を引き連れて敵陣へと向かった梶原景時と、その息子たちである。その場面を覚一本から引用し

よう。

其時下人ども、「河原殿おととい、只今情の内へまっさきかけてうたれ給ひぬるぞや」とよばはりければ、梶原是を聞き、「私の党の殿原の不覚でこそ、河原兄弟をばうたせられたれ。今は時よくなりぬ。寄せよや」とて、時をどつとつくる。やがてつづいて五万余騎一度に時をぞつくりける。足輕共に逆茂木取りのけさせ、梶原五百余騎をめてかく。次男平次景高、余りにさきをかけんとすすみければ、父の平三使者をたてて、「後陣の勢のつづかざらん、さきかけたらん者は、勳賞あるまじき由、大將軍の仰せぞ」といひければ、平次しばしひかへて、

「もののふのとつたへたるあづさ弓ひいては人のかへすものかはと申させ給へ」とて、をめてかく。「平次うたすな、つづけや者ども」とて、父の平三、兄の源太、同三郎つづいたり。梶原五百余騎、大勢のなかへかけいり、さるぐにたたかひ、わづかに五十騎ばかりにうちなされ、さつとひいてぞ出でたりける。いかがしたりけん、其なかに景季は見えざりけり。「いかに源太は、郎等ども」と問ひければ、「ふかいりしうたさせ給ひ候ござんめれ」と申す。梶原平三是を聞き、「世にあらんと思ふも子共がため、源太うたせて命いきても何かはせん。かへせや」とてとつてかへす。(中略) 梶原まづ我身のうへをば知らずして、源太はいづくにあるやらんとて、数万騎の大勢のなかを、たてさま、よこさま、蜘蛛手、十文字にかけわりかけまはりたづぬる程に、源太はのけ甲にたたかひなつて、馬も射させ、かち立ちになり、二丈計ありける岸をうしろにあて、敵五人がなかに取籠められ、郎等二人左右にたてて、面もふらず命も惜しまず、ここを最後とふせぎたかふ。梶原これを見つけて、「いまだうたれざりけり」と、いそぎ馬よりとんでおり、「景時ここにあり。いかに源太、死ぬるとも敵にうしろ見すな」とて、親子して五人の敵三人うつとり、二人に手おほせ、「弓矢とりはかくるもひくも折にこそよれ、いざうれ、源太」とて、かい具してぞ出でたりける。

まず、次男の景高があまりにも先駆けようと思気込んでいる様子を見た父景時は、「後陣の勢のつづかざらん、さきかけたらん者は、勳賞あるまじき由、大將軍の

仰せぞ」と言つて息子を引きとめようとする。この「後陣のつづかざらん」という言葉は、景時自身がその直前に発した「私の党の殿原の不覚でこそ、河原兄弟をばうたせられた。」という言葉と繋がっているのは明白である。後ろに勢が続いていないのに先駆けをすると、せっかくな先陣を逃げたとしても、それを証明する者がおらず、結局は先陣だと認めてもらえないという意味だろう。しかし、そんな父の言葉にも耳を貸さず、景高は先を駆ける。その様子を見た景時は、「平次うたすな、つづけや者ども」と言つて、長男の源太景季、三男の景茂とともに駆けていく。先ほどの言葉が、勇んでいた景高を宥めるための建前だとすれば、この言葉は子を思う父親の本音であろう。ましてや、たった二人だけで先駆けをした河原兄弟の死を聞いた直後であれば、一人で先を駆けようとしている息子を放っておくわけにはいかまい。そして景時はさんざんに戦つたのち、五十騎ほどになったあたりで一度身を引く。しかしそこに長男の景季の姿が見えないことに気付き、郎等たちに行方を尋ねたところ、「ふかいりしてうたさせ給ひて候ござめれ」と聞かされる。それを聞いた景時は、「世にあらんと思ふも子共がため、源太うたせて命いきても何かはせん。かへせや」と言つて、一度離れた戦場に、再度身を投じるのである。その際、先ほどは行わなかつた名乗りをあげて敵の視線を自分に向けようとしたり、『梶原まづ我身のうへをば知らずして、源太はいづくにあるやらんとて、数万騎の大勢のなかを、たてさま、よこさま、蜘蛛手、十文字にかけわりかけまはりたづぬる』とあるように、とにかく景季の生死を確認することを最優先して自らの命を惜しまずに戦っている様子が、生き生きと描かれている。このように、「二度之懸」という章段は、梶原景時が息子二人のために行った二度に渡る進撃を描いたものであるが、その背景には鮮明に、梶原親子の絆、愛情が存在しているのである。

ここでもう一度、「二度之懸」冒頭の河原太郎の言葉に戻つてみたい。「大名は我と手をおろさねども、家人の高名をもつて名誉す。われらはみづから手をおろさずはかなひがたし。」に込められた「大名」という表記は、その後に登場する梶原景時にも十分に当てはまるだろう。⁰⁶「大名」は、自分自身で手柄を立てなくとも、その家人の手柄によつて名をあげることが出来る。そうであるはずの梶原景時自身が、息子二人のために二度も敵陣へと向かつていったのである。それだけ深いとい

える梶原親子の絆や愛情を描くにあたって、河原「兄弟」の先陣は必要不可欠であった。直前に親子二人で先を駆けた熊谷直実と直家の姿を描き、そして梶原親子の異例ともいえる進撃を描くためには、単身である藤田行康ではなく、兄弟二人で先陣を狙つた河原兄弟の存在が重要だったのである。河原太郎高直が弟の次郎高盛に告げた言葉は、自分たちが小名であること、そして兄弟であることによつて初めて意味を持つのである。

おわりに

「二度之懸」の章段は、当時の武士の現状や思想面を知る上での有名な資料であった。「小名」であつた兄弟の決死の先陣は、避けられない彼らの運命さえも感じさせるようである。しかし、彼らの死はそのような思想面に関するだけでは、一ノ谷の合戦という一連の流れを描く中で、極めて重要な位置付けにあることが分かつた。熊谷親子と平山の先陣争いを描いた「一二之懸」から繋がっている「二度之懸」は、はじめに河原兄弟の悲哀ある死を描き、そのあとに梶原の息子を助けんがために行つた二度の進撃を描くことで、冒頭部分の「大名」と「小名」の関係性や「小名」の持つ悲しい運命を際立て、さらに兄弟と親子という関係を強調することによつて、合戦の最中に見える家族愛を引き立てているのである。そう考えると、「兄弟」である河原の存在は非常に大きい。

『吾妻鏡』には、藤田行康の子は相応の恩賞を受けたと書かれている。だとすれば、河原兄弟の子孫にも同様の恩賞が授けられた可能性はあるはずである。しかし、覚一本は恩賞を受けたとする藤田の最期を「わざと」描かなかつた。これは河原兄弟に対する恩賞の存在の消滅とも言えるだろう。先陣が認められ、それに見合った恩賞を受けたのであれば、その死は決して無駄なものではない。讃えはすれど、憐れみ悲しむことはないのである。しかし、覚一本には、そのような記述は一切されていない。藤田の存在をなくすことにより、恩賞の存在すらも消してしまつているのである。私たち読者や聞き手は、河原兄弟が勲功を得たのか否かなど考える暇もなく、ただ筆者の作り出した「小名の悲劇」を受け入れ、「兄弟」の死を深

く憐れむ。それは、語り本系統『平家物語』が持つ、優れた文学性の表れに他ならないのである。

注

- (1) 石母田正『平家物語』(岩波書店 一九五七年十一月) 第二章「平家物語の人々」。
- (2) 鈴木則郎『平家物語』における「二所懸命」の表現」(『日本文芸思潮論』桜風社 一九九一年三月)。
- (3) 『全譯吾妻鏡』(新人物往来社 一九七六年十二月)を使用。
- (4) 『国史大辞典 第二卷』(吉川弘文館 一九八〇年六月)には、「先祖以来の下野国押領使職を継承し、国府の周辺に広大な所領を有した。源頼朝に従って御家人となり、下野国守護となった。」と書かれている。
- (5) 高橋伸幸『南都本平家物語』(翻刻)、『札幌大学教養部・女子短期大学部紀要 第16号』より。引用文として読みやすいよう、独断により句読点と濁点を加えた。以降、南都本から引用する際はすべて同本を用いり、同様に変換してある。
- (6) 覚一本の表記は真名辺、さらに兄の四郎は一の谷に配属されていたため、河原兄弟を討ったのは弟の五郎であるという相違は見られる。
- (7) 『源平闘諍録(下)』の語釈には、「討たれた兄弟の下人が味方の陣中を走り回り、「河原殿兄弟、唯今白の中へ真先懸けて討たれさせ給ふぞや」と呼ばわり、後日の恩賞のための証人作りをしたという有名な挿話は、語り本諸本のものである。」とある。
- (8) 続群書類従 第七 輯上 卷第六十六「小野氏系図 猪俣」。
- (9) 『延慶本平家物語』本文篇・下(勉誠社 一九九〇年六月)を使用。以下、延慶本の本文はすべて同様である。
- (10) 『新定 源平盛衰記 第五卷』(新人物往来社 一九九一年二月)より抜粋。源平盛衰記には「藤田三郎大夫行安」と書かれ、「藤田小三郎大夫行康」と書かれていた南都本とは少しの違いが見られるが、同一人物だと考えて良いだろう。
- (11) 現在も神戸市中央区にある三宮神社の境内に、河原霊社という河原兄弟を祀った社が存在している。
- (12) 引用文は注(3)参照。三郎と小三郎という違いはあるものの、一ノ谷で先駆けをしたということから、源平盛衰記とおなじく同一人物であることを確定する。
- (13) 寿永三年四月十六日に元暦に改元したため、この時点ではまだ寿永であるが、引用した『吾妻鏡』(注(3))の表記に準じた。また、本論中の日付はすべて旧暦のものを使用している。
- (14) 前にも述べたが、城方本のみ「三草勢揃」に藤田の名を載せておらず、「坂落し」の章段の初めの部分に、甥である江戸四郎信資の放った遠矢に射られるという延慶本や長門

本、四部合戦本とはほぼ同じ最期を描いている。

- (15) 覚一本にはどちらが先陣と定められたかは明記されていないが、延慶本には「サテコソ、平山一陣、熊谷二陣二被成ニケレ。」とあり、さらに源平盛衰記にも「功はいづれも取り取りなれども、平山先陣に定まりけり。」と書かれている。

(16) 佐々木八郎氏が『平家物語評講 下』(明治書院 一九六三年八月)の二一三七―一三八頁にて、「坂落」の章段を例に挙げ、「秩父、足利、三浦、鎌倉―「秩父」は秩父・畠山両氏、「三浦」は三浦・和田両氏、「鎌倉」は梶原・大庭氏らを用いる―などはいわゆる「大名」であり、「猪俣」以下をば「党」(武蔵七党)として区別したものと考えられる。そこでこの高直のことは、大名は拔群の「家人」の功名をもってその主君たる自分の名譽とするが、大名ほどの身分でないわれら党人はそのような「家人」をもっていないのだから、独力で勇往邁進し、敢闘して成功をたてる以外にはないという意味であつて、大名は他力、党人は自力の区別があることを語ったものである。」述べている。梶原を大名だと言えるところの根拠としたい。